

後のへい死も多く被害量は大きい。いずれも原因、対策及び被害の度合については明確でない。

5、要約

1、産卵について

イ、1.2 Kgの親は、1回当り15個、卵重量4.29 gの卵を産む。親は大きいほど産卵数、卵の大きさ及びふ化稚亀が大きく、受精率も高い傾向を示した。

ロ、産卵は、3～10月まで行ない最盛期は7月で、5～9月に全体の約80%産卵する。年間7～8回産卵すると見られる。

ハ、経済的に最も有利な親スッポンの雌雄比は、5～8：1で受精率90%以上であった。また、一定の性比でも受精率は、6.7月をピークとする季節変動を示した。

2、ふ化について

ふ卵器を用いたふ化技術の確立を目指し、試験を行なった結果、ふ化適温33℃、ふ化日数3.7～4.8日、ふ化率85%で、ふ化管理が容易になり、大量に種苗を生産することが可能になった。

3、養成について

イ、本県における商品サイズまでの養成期間は、他県が4～5年かかるのに比べ2～3年と短いことが明らかとなった。

ロ、高密度養殖の可能性が見い出された。

ハ、当才稚亀を冬期に保温飼育することによって、歩留り及び成長が良く、保温効果大きいことが示された。

4、疾病について

主な疾病は、穴あき病、オタフク病、ワタカブリ病、赤班病などが見られた。

6、残された問題点とその解決方針

1、疾病について

疾病が多発し被害量は大きく、スッポン養殖の発展を妨げている。しかしながら、原因、対策などについては明確でない。継続して、疾病の実態、池の環境、病亀の外部及び病理学的研究、病源の究明、対策などについて調査研究を行なう予定である。

2、養成について

放養密度と生存歩留り、増重割合、増肉係数などを、経営面も考慮に入れて試験研究を継続して行なう予定である。併行して、養殖場の実態調査も進めたい。